

=====

THE VEDANTA KYOKAI

日本ヴェーダーンタ協会の情報

2005年3月 第3巻 第3号

<http://www.vedanta.jp/multimedia/pdf/newsletter/index.html>

このメールを希望でない方はタイトルを停止と書いて返信ください。

=====

2005年6月5日(日)

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ公開生誕祝賀会を池袋の豊島公会堂で催します。(無料)

詳しいプログラムが決まりしだいご連絡をいたします。

皆様のご参加をお待ちしております。

=====

目次

- ・ かく語りき 聖人の言葉
  - ・ 3月の予定
  - ・ ベルルマート本部からのお知らせ
  - ・ 2月の例会
  - ・ 今月の思想
  - ・ 忘れられない物語
  - ・ 2月の例会 - 午後の部
- 

今月の予定(終了分)

生誕日

- ・ シュリー・ラーマクリシュナ 3月12日(土)
- ・ スワミー・ヨガーナンダ 3月29日(火)

## 協会の行事

・3月の例会

シュリー・ラーマクリシュナ生誕記念祭  
3月20日(日) 10時30分 逗子協会

-----  
ベルール・マート本部からのお知らせ

津波被災地域への救援および復興支援活動

(アンダマン・ニコバル諸島、タミル・ナードゥ州、ケララ州、スリランカ)  
ラーマクリシュナ・ミッションより

募金のお願い

ラーマクリシュナ・ミッションでは、津波の被災地域に対し大規模な初期救済活動を行いました。現在、活動は次の段階へと進み、被災した方々への復興支援を行っております。また、効果的な支援活動のために、被災者の方々の要望調査も実施しております。最も深刻な被害を受けた地域では、被災者の多くが漁業を営んでいたため、当ミッションでは対策措置として、船、漁網、避難施設を提供いたしました。また、アンダマン・ニコバル諸島では、両親を亡くした子供達のリハビリテーションにも取り組んでおります。

今後は、復興支援活動を更に拡大していく予定ですが、計画がどの程度具体化できるかは活動資金にかかっています。支援活動に必要な金額は、概算で1億ルピー以上と思われます。

津波の救援活動および募金の送金方法の詳細については、次のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.sriramakrishna.org/tsunami/>

または、

<http://www.sriramakrishnamath.org>

これまでに募金をして下さった皆様の尊いお気持ちに心より感謝を申し上げます。また、募金をご希望される方々がいらっしゃいましたら、是非ともこの活動にお力をお貸し下さい。募金の宛先は以下の通りです。

The General Secretary  
Ramakrishna Mission (Headquarters)  
P.O. Belur Math, Dist.: Howrah  
West Bengal-711202, India

Fax: 91-33-26544346  
E-mail: rkmhq@vsnl.com

または、

The President  
Ramakrishna Math  
Mylapore, Chennai 600 004,  
Tamil Nadu, India  
Fax: 044-24934589  
E-mail: srkmath@vsnl.com

-----  
2月の例会

「ナレンが母カーリーを受け入れた」

2月20日(日)の逗子協会の例会では、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの第143回生誕記念祭を執り行いました。ベルの音が例会の始まりを告げると、参加者は二階の礼拝室に静かに集まり、スワミー・メダサーナンダが礼拝を始めました。続いて、隣の集会室に移動し、ヴェーダ讃歌の詠唱、「ラージャ・ヨーガ」に関するスワミー・ヴィヴェーカーナンダの講話集を誦読(日本語および英語)しました。

スワミーは、いつも通訳をして下さる伊藤さんが講話の時間になってもまだいらっしやらなかったのが、英語と日本語で歓迎の言葉を述べました。しかし、部屋の中を見回し参加者の大半が日本人あるいは日本語が分かる方であることを確認すると、日本語だけで進めた方が効率的だと考え、「ちょっと困ります」と笑いながら日本語で言いました。「親愛なる伊藤さんが遅れているので、日本語で進めなければいけません。日本語が分からない方には申し訳ないのですが、二カ国語で話をするとう話の内容に集中出来ないのです。」

スワミーは今日の講話のテーマである「ナレンドラは母カーリーを受け入れた」について、次のように言いました。「求道者は通常、形のある神を信仰しないと、霊性の生活を実践して霊性を向上させるのは困難です。抽象的観念に集中するのは大変難しいのです。普通、信仰の目的は神を喜ばせることです。神に感謝を捧げ、愛と尊敬を捧げ、神に祈ることです。」

(ここで、伊藤さんが到着し、皆の歓声が上がりました。伊藤さんは、「廊下で聞いていましたが、マハラジの日本語は素晴らしいですね」とおっしゃいました。マハラジは、「この評価に全員が賛成するとは思えません」と冗談を言いました。記者個人としては、日本語の宗教用語にあまり通じていないので、伊藤さんがいらして本当に助かりました。)

スワミーは講話を続けました。信仰のためには神の姿を想像せねばなりません。その想像とは現実的なものであり、非現実的な架空のものを想像すること

ではないそうです。空に浮かぶ宮殿のようなあり得ないものを想像するのではなく、神についての現実的な想像をします。「これが、神について想像することと、根拠のない幻を思い描くことの違いです。神の存在を表すシンボルや媒体を受け入れ、そのシンボルや媒体、偶像の中にある神の存在をイメージするのは。偶像は、石で出来ていようと木製でも土製でもかまいません。スワミー・ヴィヴェーカーナンダもこうおっしゃっています。『私はこれまでに、信者が、おお土よ、木よ、石よ、金属よ、どうか私を気に入って下さい、私の願いを聞いて下さい、などと言うのを聞いたことがない。』その通りです。皆が祈っている相手は神様なのですから。」

これに関して、スワミーは主ジャガンナートの車祭（ロト・ヤットラ）についてのベンガル語のことわざについて話しました。この車祭では、主の像を乗せた大きな山車（だし）を信者らが引いて歩きます。沿道に並んでいる人々は、山車が来ると主への信仰を表すためお辞儀をするので、一見したところでは人々が信仰しているのは道路や山車、偶像であるかのように思えます。偶像の主は笑みを浮かべています。「偶像を用いるのは、言わば靈性の生活における幼稚園レベルなのです。集中し瞑想出来るようになればだんだんと、形のない神、至高の実在に集中出来るようになるのです。それはちょうど、父親の写真を見て父親のことを思い出すようなものです。」

「ヒンドゥー教に様々な形の神が存在することも誤解されやすい点です。ヒンドゥー哲学では、実在は一つですが、二つの面を持ち合わせてます。唯一の実在は、絶対であるのと同時に相対です。実在が相対的である時は活動的で、維持、破壊を行います。これが実在の相対的な面です。一方、実在が絶対的である時には、名前、形、動きがありません。このように、絶対と相対は実在の持つ二つの面です。活動と非活動とも言えます。人の起きている時と寝ている時のようなものです。」

「母カーリーは、ヒンドゥーの神々の中に次のように溶け込んでいます。マハーカーリー（偉大なるカーリー）、やニッティヤカーリー（永遠なるカーリー）は絶対で、想像の前段階であり、純粹の意識であり、名前や形、動きはなく宇宙も存在しません。もう一つの相対には、恐怖を蹴散らすカーリー、恵みを与えるカーリー、保護するカーリー、破壊するカーリー、などがいます。このように、カーリーには絶対と相対の二つの面があるのです。それらは一つであり、同一の実在なのです。」そしてスワミーは、絶対のカーリーも相対のカーリーも黒い肌をしているのはなぜか、という疑問に触れ、シュリー・ラーマクリシュナの説明を引用しました。師によれば、私たちははるか遠くからカーリーを見ているので肌が黒く見えてしまうとのことですが、これは、非常にうなずける話です。カーリーに近づいていくと、最後には色がなくなります。ちょうど、空や海に近づいていくと、実は色がなくなることが分かるのと同じです。

そして、スワミーは、サットワ（調和）、ラジャス（活動）、タマス（不活動）の性質について説明しました。カーリーはこれらによって、想像、維持、破壊という活動を行います。スワミーは言いました。「私たちが束縛するのも解放するのも、同じ母カーリーです。」普通の人々は人生で多くのものを享受したいと考え、高き魂は解放を求めます。「ですから、かりそめのことで霊的なことでも、何を欲しようと、人は母カーリーに祈って願いを叶えてもらわねばなりま

せん。」

スワミーは、ナレンドラナートが最初、カーリーを受け入れなかった理由を説明しました。ナレンドラは当初、神への猜疑心、無神論、物質主義を助長する西洋の教育論を引用していたのです。当時のインドでは、イギリスの習慣が広まると共に、キリスト教の伝道師がキリスト教はヒンドゥー教に優ると教えるようになっていました。ヒンドゥー教を批判するやり方は実に巧妙で組織的でした。彼らは学校や大学のカリキュラムに聖書の学習を取り入れ、授業中にヒンドゥー教は偏狭で迷信に満ちていると教えたのです。ナレンドラナートも、西洋の教育を受けた他のインド人の若者同様、ヒンドゥー教の慣習、とりわけ偶像崇拜を批判するようになりました。

「ブラフモ・サマージは、ヒンドゥー教の本質をより論理的に示すことを目的としたグループでした。」ウパニシャッドで強調されるような至高の存在を信じてはいましたが、ヒンドゥー教で行われる儀式をほとんど受け入れず、偶像を通じたあらゆる形の礼拝を認めていませんでした。

インド人の若者の多くはキリスト教に改宗することは望んでいなかったのに、ブラフモ・サマージに傾倒していきました。サマージの入会条件の一つは、いかなる形の偶像崇拜をも放棄すると誓うことでした。

ラカール（後のスワミー・ブラマーナンダ）とナレンドラナートは古くからの友人で二人ともサマージの会員でした。ラカールはダクシネシュワルに来てシュリー・ラーマクリシュナを訪ね、すぐにカーリー寺院に向かいました。後からナレンがダクシネシュワルに来た時、ラカールが偶像に礼拝しているのを目にして、この心優しき友人を、サマージの誓いを破ったと責め立て偽善者だとののしりました。シュリー・ラーマクリシュナはこの時仲介に入って、ラカールが今ではカーリーを信仰しているのだと説明しました。そして、形のない神を礼拝することは誰の性質にでも合うというわけではなく、ラカールの靈性修養の邪魔をしないよう言いました。

スワミーは言いました。「偶像について次のような疑問が浮かんでくるでしょう。『無限の存在がどうやって有限になれるというのだろうか。』形なきものがどうやって形あるものになれるというのでしょうか。ナレンドラナートも同じ疑問を持ったのです。」

「ナレンドラナートがシュリー・ラーマクリシュナについて一番驚いたのは、この、偶像を崇拜をする聖職者が多大なる靈的知識、慈悲、愛、純粋さを持ち合わせていたことでした。このような高い靈性を持つ持つものがカーリーのような偶像を信仰するのを正しいと認めるなんて、と不思議に思いました。もちろん、シュリー・ラーマクリシュナはブラフマンと母カーリーは全く同一のものであると説明しましたが、ナレンは納得しませんでした。

「シュリー・ラーマクリシュナは、ナレンが後に世界に宗教を伝える教師となって、シュリー・ラーマクリシュナの説く宗教の調和というメッセージを伝え広める運命にあることを知っていたので、『ナレンは母カーリーを受け入れなくてはならないのだが』と気に病んでいました。ナレンドラナートが偶像崇拜の背後に

ある論理を受け入れない限り、彼の宗教概念は偏った、了見の狭いものになってしまうからです。そんな人間が世界の教師になるのは難しいでしょう。」

スワーミーは、ナレンドラナートの父親が急死し、家族の生活が困窮を極めたことを話しました。食料を手に入れることさえ困難だったため、ナレンはとにかく職を探し、わずかながらの稼ぎをすべて家族に与えよう、と自分は何も食わずにいたほどでした。その時、ナレンはシュリー・ラーマクリシュナに助けを求めることを思いつきました。カーリーを受け入れることは出来なくとも、シュリー・ラーマクリシュナがカーリーに望めば何でも叶えてもらえることを知っていたからです。ナレンはシュリー・ラーマクリシュナに、自分の家族が豊かになるよう母カーリーに祈ってくれるよう懇願しました。シュリー・ラーマクリシュナは、『母(マー)にそんなことは頼めないから、ナレンのことを祈ったら、自分を愛していないナレンの面倒をなぜ自分が見るのかと、マーに断られた』と答えました。

「そして、シュリー・ラーマクリシュナは、その晩(火曜日)はマーに祈るのにはとりわけ日が良く、ナレンドラナートがその晩祈ることはすべて母カーリーが叶えてくれると断言しました。そして、カーリーはこの宇宙を創造した全能なる者なのだから、ナレンのささやかな願いなど必ず叶えてくれると言って、ナレンに寺院へ行くよう説得しました。ナレンドラナートは師の言葉を信じ、夜になるのを待ちました。九時になると、シュリー・ラーマクリシュナはナレンを送り出しました。ナレンは寺院に入った瞬間、聖なる母に出会ったことを感じました。深い喜びを感じ、マーは生きているのだと感じました。すぐに彼は祈りました。『私に識別する力を与えて下さい。知識を与えて下さい。深い信仰を与えて下さい。それ以外は何もありません。』彼は繰り返し繰り返し、祈りました。」

「ナレンが戻るとすぐ、シュリー・ラーマクリシュナは家族のことを祈ったかと尋ねました。ナレンは、そのことをすっかり忘れていたと答えました。シュリー・ラーマクリシュナはもう一度彼を寺院に送り出しました。ナレンが戻ると再び同じ質問をし、ナレンも同じ答えをしました。シュリー・ラーマクリシュナはナレンを叱り、もう一度寺院に行き靈的な感情を抑えて、お金に困った家族を助けて下さいとマーに祈るよう言いました。三度目に寺院に行った時、ナレンドラナートは自分を見失うことはありませんでした。しかし、以前シュリー・ラーマクリシュナが、人はやっと皇帝に謁見した時には、カボチャや瓜のようなつまらない物をせがんではいけない、と言っていたのを思い出しました。」

「宇宙の創始者であるマーにお金をくれと頼むのは、皇帝にカボチャをくれと言うようなものですから、ナレンは、識別、知識、信仰を授けてくれと繰り返し祈ったのです。師の元に戻った時、経済的な助けを求められなかったのは、シュリー・ラーマクリシュナのせいだとナレンは言いました。自分はシュリー・ラーマクリシュナの策略にうまいことはめられてしまったのだから、自分の家族のことはシュリー・ラーマクリシュナが責任を持ってマーに祈るべきだと言い張りました。シュリー・ラーマクリシュナは、何度断ってもナレンが言い張るので、ナレンの家族は最低限の衣食に困ることは二度とない、と固く約束しました。」

ナレンドラナートは歌の才に秀でていましたが、この時まで母カーリーを讃える歌を全く知りませんでした。その晩、ナレンは、シュリー・ラーマクリシュナ

に母カーリーの歌を教えてほしいと頼み、師が『おお母よ、あなたは私たちの唯一の救い主』を教えると、ナレンは一晩中歌っていました。翌日、カルカッタから二人の客人が見えました。客人は、部屋の隅で寝ているナレンのそばで師が大変うれしそうにしているのを目にしました。師は興奮しながら、『ナレンがタベ母カーリーを受け入れ、マーを讃えて一晩中歌い続けていたのだ』と説明しました。「師は、子供のように喜んでいらっしやいました。何度も何度も客人に、『ナレンが母カーリーを受け入れたのは素晴らしいことじゃないかね？いいことだろう？』とおっしやいました。」

これはスワミー・ヴィヴェーカーナンダにとって大きな転機でした。スワミー・ヴィヴェーカーナンダの霊性の生活は100%完全で調和の取れたものとなり、世界の宗教の先生という役目を果たすことが出来たのです。

(記者記す)

-----  
今月の思想

人には、望ましいもの (shreyas・シュレヤス) と楽しいもの (preyas・プレヤス) とがやって来る。思考力のある人は考え、両者を識別する。知性のある人は五感が喜ぶものではなく選ぶべきものを取る。知性のない人は、(肉体のような)形あるものを増やし、守るために、五感が喜ぶものを選ぶ。

(カタ・ウパニシャッド 第1部第2章第2節)

-----  
忘れられない物語

「我が身を守る」

ブッダの語った、曲芸師一家のお話です。

おじいさんと孫娘は軽業師(かるわざし)で、あちこちの土地に行っては軽業を見せる旅芸人でした。ある日、二人はブッダのところに来て、互いの身を守り、支え合うにはどうすれば一番良いのかと話し始めました。おじいさんは、互いに相手の身を案じればいいのだと言いました。「孫が軽業をやっている時にはわしがよく見ててやればいいし、わしがやっている時には孫がわしを気遣えばいい。そうしたら互いの身を守れるんじゃ」と言いました。

すると、孫娘はブッダに尋ねました。「おじいさんの言ってることは、逆ではないでしょうか？二人とも自分で自分に気をつけた方がいいと思います。そうすれば、お互いの身が守れるし、軽業ももっとうまくなる。」

ブッダは言いました。「お孫さんは若いのに賢い。おじいさんが我が身を自分で守り自分のやることに注意すれば、お孫さんの安全も守ることになる。お嬢さ

んは自分で自分に気をつければ、二人とも安全になるし、周りの人の安全にもなるのだ。」

( 仏教の言い伝え )

-----  
2月の例会 - 午後の部

午前の部が終わると、パピア・バナージーさんとソフィア・ハズラが作って下さった昼食のブラサードを、皆でおいしくいただきました。

二時頃、午後の部まで残っていた方々が集会室に戻りました。スワミー・メダサーナンダと一緒にヴェーダ讃歌を数曲歌い、スワミ・ヴィヴェーカーナンダの著書から抜粋を誦読し、午前の講話についての質疑応答を行いました。そして、サムドラ・グプタさんとアナンヤ・カマクルさんがそれぞれベンガル語の宗教歌を歌われ、シャンティさんが自作の日本語の歌を歌われました。最後に、スワミの先導で、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの弟子がサンスクリット語で歌詞を書いた歌を皆で歌いました。短い瞑想の後、例会が終わりました。

=====

発行：日本ヴェーダータ協会  
249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1  
Tel：046-873-0428  
Fax：046-873-0592  
Website: <http://www.vedanta.jp>  
Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)  
[KENB019J]

=====